

修士論文（要旨）

2013年1月

中学生の親密な友人関係の形成における内的作業モデルと自己受容性との関連

指導 幸田るみ子 教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻  
211J4010  
土谷健祐

## 目 次

第1章、はじめに	.....	1
第2章、目的	.....	1
第3章、方法	.....	1
第4章、結果	.....	1
第5章、考察	.....	2
第6章、今後の課題	.....	2
引用・参考文献		

## 1. はじめに

文部科学省の調査（2012年2月6日公表）で、不登校の生徒・児童やいじめの認知件数など数多くの問題が指摘されている。そして、古市（1997）の研究から、友人関係の良し悪しが学校生活の満足感に影響を与えていると示唆されている。これらの研究から、不登校やいじめの根本には友人関係が関連していると思われ、児童期・思春期前期にとって友人関係が重要な意味を持っていると伺える。

過去の友人関係に関する研究では、小比木（1984）や岡田（2002）が、自分の内面を開示せず、表面的に円滑な友人関係を取る傾向がある「希薄化」の状態にあることが指摘されている。また、互いに自分の内面を開示して付き合う親密な友人関係が、社会的スキルや適応感、精神的健康などに影響を与えることが示されている（松井，1990；高井，1999）。これらの研究から、友人関係の親密さが、さまざまな心理社会的問題に関連していると考えられる。

内的作業モデルは、粕谷・菅原・河村ら（2000）や大石・小林ら（2006）などの研究から、安定した内的作業モデルを持っている人ほど、対人関係や友人関係に良好な関係を与えていると考えられている。

自己受容性は、廣實（2003）や吉岡（2001）などの研究から友人関係に影響を与えていると考えられる。したがって、自己受容性を調査し、友人関係との関連を検討する意義があると思われる。

## 2. 目的

本研究では友人関係の深度、内的作業モデル、自己受容性の関連を明らかにし、内的作業モデルと自己受容性が友人関係の深度に関連しているかを調査することを目的とした。本研究の仮説は「内的作業モデルが安定型であり、自己受容ができていくほど、親密な友人関係との間に関連がある」と考えた。

## 3. 方法

本研究は、A県B市の公立C中学校の生徒、414人を対象とし、質問紙による調査を行った。調査期間は2011年4月～2012年3月であった。

本研究に用いた尺度は、友人関係の深度には「友人関係の深度尺度」（石田・渡邊，2008）、内的作業モデルには「内的作業モデル尺度」（戸田，1988）、自己受容感には「自己受容性測定スケール」（宮沢，1987）をそれぞれ用いた。

尚、桜美林大学の倫理委員会へ審査を申請し、研究の許可を受け実施した（提出番号11034）。対象者の基礎統計と各尺度に対してIBM SPSS Statistics 20を用いて再度因子分析を行った上で、性差と学年差についての分析を行い、友人関係深度を従属変数とした探索的重回帰分析を行った。

## 4. 結果

「友人関係の深度尺度」は、石田・渡邊（2008）の研究の「友人関係深度因子」の1因子構造を採用した。分散分析を行った結果、性別の主効果が有意であった（ $F(1,272)=6.42, p<.05$ ）。性別によって友人関係の深度に差があり、女子の方が男子より有意に友人関係深度得点が高いと示唆された。

「内的作業モデル尺度」は、粕谷・菅原（2001）によって中学生用に修正されたものを使用した。再度因子分析を行った結果、「secure 因子」、「ambivalent 因子」、「avoidant

因子」の3因子構造を採用した。次に分散分析を行った結果、交互作用、性別と学年における主効果は見られなかった。

「自己受容性測定スケール」も再度因子分析を行った結果、「自己価値因子」と「自己理解因子」の2因子構造を採用した。次に分散分析を行った結果、「自己理解因子」の学年の主効果が有意であった ( $F(2,272)=6.36, p<.05$ )。学年は「自己理解因子」に影響を与えているということが示唆された。さらに学年のどの群間に有意な差があるかを分析するために、多重比較を行った。結果、1年生と2年生・3年生の間に「自己理解因子」得点の有意な差が認められた。

次に、「友人関係の深度尺度」を従属変数として、探索的な重回帰分析を行った。独立変数として、**secure** 因子、**ambivalent** 因子、**avoidant** 因子、自己価値因子、自己理解因子、年齢（学年を変換したもの）、性別を強制投入した。結果、友人関係の深度と **ambivalent** 因子、**avoidant** 因子との間には負の関連性があり、自己理解因子、性別の間には正の関連性があることが示された。

## 5. 考察

外界と接触することに対して、関係を築きたいという欲求と築く過程で拒否されることへの不安といった両価的な考えである **ambivalent** の傾向や、他人との接触を避けようとしたり、他者は信用するに足らない・援助が期待できない存在であるといった考えである **avoidant** の傾向があるほど、友人関係深度は低くなるのではないかと推測された。また、自分の長所や短所、言動といったさまざまな特徴を理解することができ、自己理解が深まるほど、友人関係の深度が高くなるのではないかと推測された。

## 6. 今後の課題

今後の課題として、本研究で使用した「友人関係の深度尺度」の質問項目が、友人との親密さを測定するというよりも友人間のコミュニケーションの能力を測っている可能性があり、友人関係深度尺度の再検討が必要である。また、対象者を増やし、「自己受容性測定スケール」の因子構造の再検討が必要と考えられる。

## 引用・参考文献

- 石田裕久・渡邊由季子（2010）：自己開示における直接的・間接的コミュニケーションのあり方と友人関係 人間関係研究, 9, 67-84,
- 大石佳世子・小林康江（2006）：青年期における親になることに対する態度の構成要素と内的ワーキングモデルとの関連 山梨県母性衛生学会誌, 5, 64-69,
- 岡田努（2002）：友人関係の現代的特徴と適応感および自己像・友人像の関連についての発達的研究 金沢大学文学部論文集（行動科学・哲学編）, 22, 1-38,
- 粕谷貴志・菅原正和（2001）：中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 11, 137-145,
- 粕谷貴志・菅原正和・河村茂雄（2000）：中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀, 10, 91-98,
- 小此木啓吾（1984）：現代青年への視覚 精神分析学的青年論青年心理, 43, 156-176,
- 高井範子（1999）：対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究 教育心理学研究, 47, 317-327,
- 戸田弘二（1988）：心理測定尺度集「人間と社会のつながりをとらえる；対人関係・価値観」（心理測定尺度集；2）109-113,
- 廣實優子（2003）：現代青年の交友関係から見た自己受容性と社会的スキル 広島大学大学院教育学研究科紀要, 52, 305-310,
- 古市裕一（1997）：小・中学生における学校生活の楽しさとその規定要因 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 248,
- 松井豊（1990）：友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック, 川島書店, 283-296,
- 宮沢秀次（1987）：青年期の自己受容性の研究 青年心理学研究, 1, 2-16,
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2012）：平成 22 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- 吉岡和子（2001）：友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容からとらえた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30,